

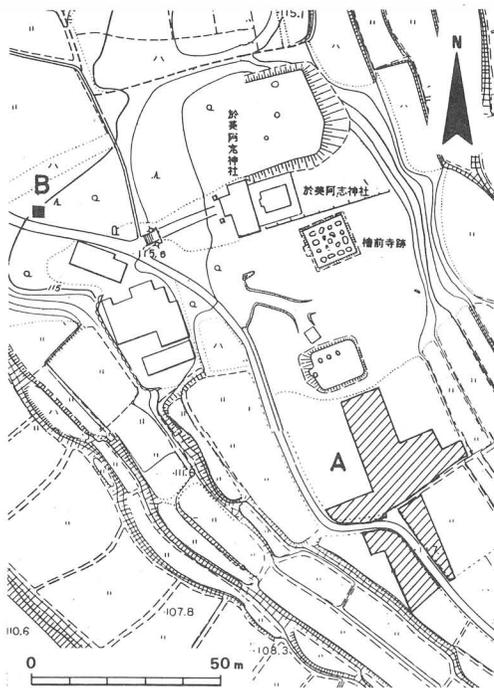
桧隈寺第1次の調査

(昭和54年7月～昭和54年9月)

この調査は明日香村の依頼をうけ、当研究所の飛鳥地域における寺院調査の一環として実施したもので、今回はその初年度にあたる。桧隈寺は東南から西北にのびる丘陵にあり、現在は於美阿志神社の境内になっている。その遺構には神社境内の北端に講堂と推定される土壇が、南東に重要文化財の十三重石塔の立つ塔跡が、南端には中門と推定される高い土壇が残っている。今回の調査は南門の検出を主目標とし、中門推定地の南に調査地を設定した。

なお、今回の調査では講堂西方において便所建設に伴う小規模な事前調査を行っており、合わせて報告する。

南門地区 調査地は東西の畦畔で北区・南区に分かれる。両区とも床土の下は直接地山となるところが多い。地山は白灰色粘土が斑状に入った黄褐色粘

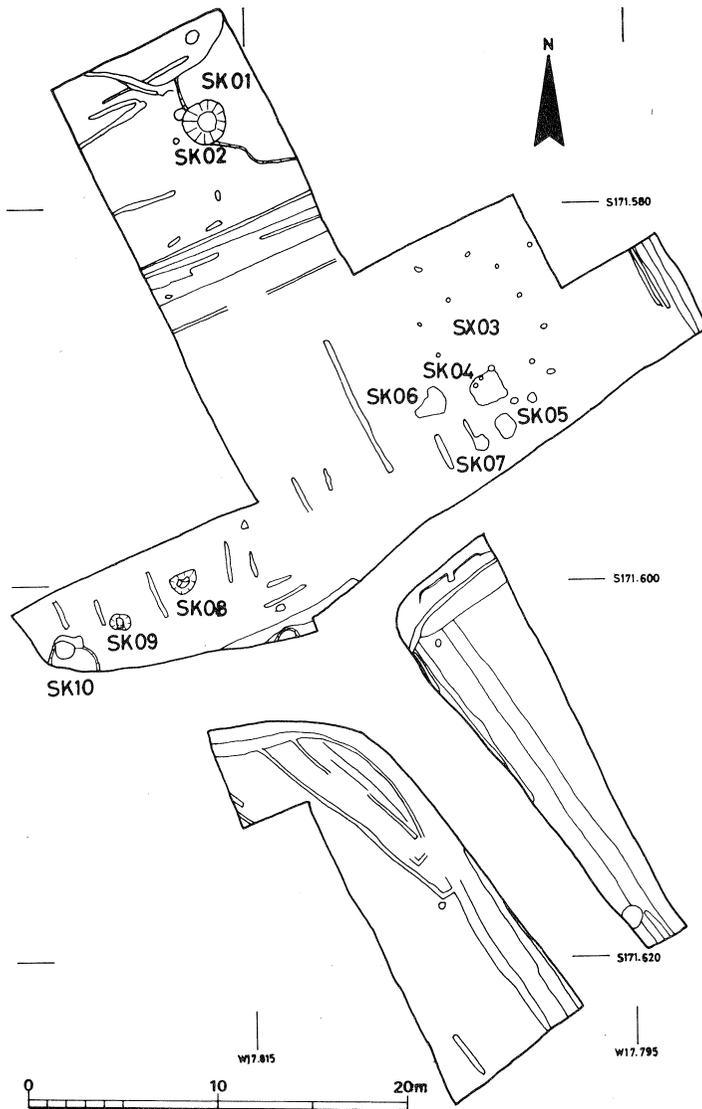


調査地位置図(1:2000) A 南門地区 B 講堂西方地区

土や花崗岩の霉爛した赤褐色砂質土である。北区東南よりでは地山との間に厚さ20cm内外の整地土層が認められた。遺構の大半は地山面で検出した。

主な遺構は北区で検出した土壇・ピット群があるが、南区ではみるべきものはない。SK 01は北区北端で検出した瓦溜で、なお東へひろがる。大量の瓦に12世紀代の瓦器が混在している。SK 02はSK 01の下から検出した円形の土壇である。上面の径2.2m、底径1m、深さ1.1mである。内壁および底面に厚さ5cmの褐色粘土を貼り、一部に平瓦をはりつけている。埋土は黄

褐色粘土と瓦片を互層に固くしめた状態で、埋土上部に12世紀の瓦器を含む。この土坑の性格は不明である。ピット群SX03は北区東南部で検出したもので、塀や建物の形状をなすものの、まとまりが明確でない。ピット埋土には瓦器が混じる。この近くの浅い土坑SK04～07も同様に埋土に瓦器が含まれている。SX03は地山面で検出したが、その一部は整地土に覆われていた。整地土は暗褐色粘質土・暗紫色粘質土で全体に瓦・瓦器片を含み、一部に瓦片が塊状に集積したところや、礎石か基壇化粧材と思われる花崗岩・凝灰岩断片が混じる箇



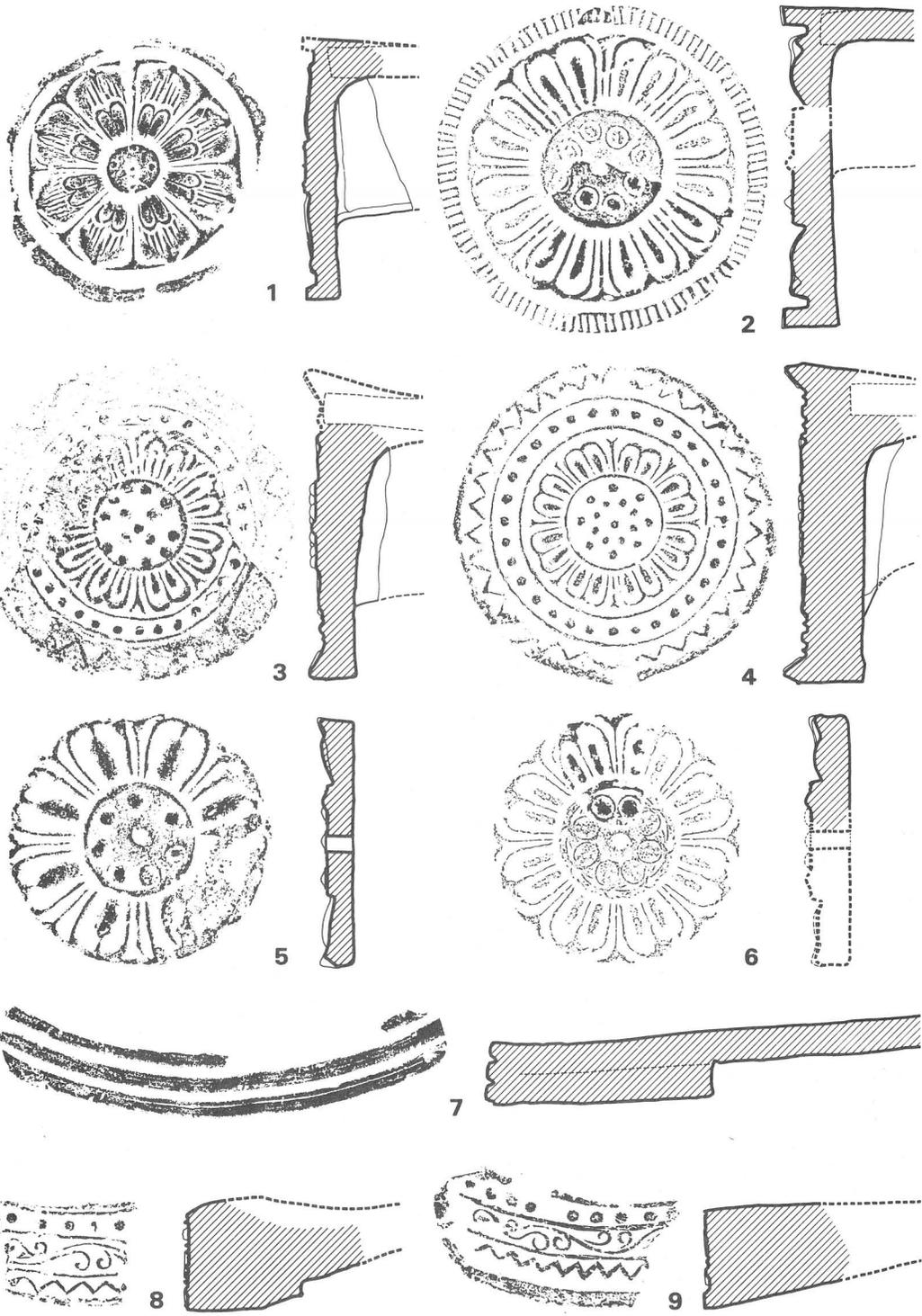
松隈寺 第1次調査
遺構配置図 (1:400)

所もあった。SK 08・09は北区西南部で検出した礎石を落としこんだ土塚である。埋土には瓦・瓦器片を含んでいる。礎石は上面を平坦にしかだけの不整形なもので、造り出しはない。ともに黒色斑入りの花崗岩製で風化が著しい。大きさはSK 08出土の礎石でみると上面が0.4 m × 0.6 m，高さ0.6 m，SK 09出土のものもほぼ同じである。SK 10は北区西南隅の大土塚である。なお南へひろがる。埋土に染付陶器を含む。以上のほか発掘区全域に種々の方向をもつ小溝を多数検出している。中世を上限とし、かなり新しい時期のものまでである。なお、北区北端部には中門基壇の基礎地業の一部がかかることも予想されたが、掘込地業などはみられなかった。

講堂西方地区 調査地は講堂西方40mの所で中世以降その存在が知られる道興寺跡と伝えられる場所である。9 m²を発掘し、基壇土と思われる褐色粘土層を確認した。この粘土層は厚さ45cmで、その下は地山になる。発掘区内では礎石・根石等はみられなかった。表土および粘土層の上部の攪乱層から出土した多量の瓦には注目すべきものがある。

出土遺物 出土遺物には瓦・土器・鉄釘等があるが、ここでは瓦について紹介する。瓦は表土、水田床土、整地土層、土塚などから出土し、直接使用建物との関連でとらえられるものはない。瓦は北区ではひろく全域に散布し、北端・東南部に多く、とくに北端部に著しい。南区では瓦は殆んど出土しない。出土した瓦には軒丸瓦・軒平瓦・榎先瓦・鷗尾および丸・平瓦がある。

軒丸瓦には3型式7種19点ある。I型式(1)(52Pの図の1，以下同じ)は素縁素弁八弁蓮華文で、弁端が反転し珠文状をなす。花卉中に、接続する複子葉と左右4条ずつ楔形の火焰を線で表わす。小さな中房に1+4の小蓮子を配する。2点出土。II型式は複弁八弁蓮華文で、3種ある。A・Bは細い直立縁に幅線文を表したもので、「桧隈寺式」と称されるもの。A(2)とBは子葉の盛りあがり異なり、Bの類例(奈良国立博物館『飛鳥白鳳の古瓦』の291)によれば中房の高さや蓮子の配置が異なるものの、間弁が花卉に接する点などは良く似ている。Cは複弁の小片が出土しただけであるが、類例(前掲書の231)によれば、周縁は粗い線鋸齒文を表した傾斜縁となる。A 7点，B 2点，C 1



松隈寺出土軒瓦実測図（1：4）

点出土。Ⅲ型式は藤原宮式に類似した複弁八弁蓮華文で、 $1 + 8 + 8$ の蓮子を配するA（4）と $1 + 4 + 12$ の蓮子を配するB（3）、さらに中房がやや小ぶりなCがある。Aはこれまでによく知られている6275-G型式で6点、B、Cは各1点出土。

軒平瓦は三重弧文と扁行唐草文の2型式4種11点ある。三重弧文には胎土の特徴から軒丸瓦Ⅱ-A・Bと組みあうとみられるもの（7）とそうでないものがある。前者5点、後者7点出土。扁行唐草文は右行するもので、唐草文の表現が異なる2種があり、（8）は幅広の段顎、（9）は無顎である。前者5点、後者5点出土。奈良県教育委員会による塔跡の調査『重要文化財於美阿志神社石塔婆修理工事報告書』では（8）の文様で無顎のものが出土している。

種先瓦は8点あり、単弁八弁（5）と複弁（6）の2種がある。（5）は比較的大きな中房に円圏をもつ大粒蓮子7個を配し、間弁先端は花卉に接している。11点出土。（6）は小片であるが、軒丸瓦Ⅱ-Cに似た複弁で中房には円圏つきの大粒蓮子を一重めぐらす。1点出土。鷗尾は側面の半円形透し付近の小片1点が出土した。表面に突出した羽形文様が表わされている。なお、文字瓦が2点あり、ともに平瓦凸面に下□、□冊二長□とヘラ書きしている。

（1）、（8）、（9）が講堂西方地区出土、ほかは南門地区出土である。（1）、（2）、（3）、（6）、（9）などは今回新たに知られたものである。大量の丸・平瓦は凸面縄叩きのものが多くみられ、凸面格子叩きのものが少量あった。

まとめ 今回の調査で主眼とした南門の遺構は確認できず、検出した遺構は中世以降に限られ、古代に遡るものは皆無であった。しかし、北区西南部分の落としこまれた礎石の存在、北区東南部での礎石・基壇化粧材と思われる花崗岩・凝灰岩片の出土、瓦の出土状況などからみて、北区に何らかの建物が存在したことは推定できる。さらに、北区のうちでも南半中央部、すなわち中門土壇の南30m前後付近は、北区で最も遺構の稀薄なところであり、そのあたりに、ある時期まで土壇が残存していたことを想定することが可能である。境内に残る基壇の高さに比べて、境内南方の地域はかなりレベルが低いことからみて、この一帯が後世大きく削平されていることも上記の推測をたすけよう。